

「とにかく遊べ！」

もし私が、教員採用試験の面接官ならどんな質問をするか。

「教育実習で何を学びましたか？」

「教師にとって大事なことは？」

「いじめに対する指導は？」

そんな質問はしません。それは多分教科書的な答えが返ってくるからです。私なら

「あなたが子ども時代に一番楽しかった遊びは何ですか？」

と聞いてみたいのです。そんな質問に、目を輝かせて生き生きとしゃべり出したなら、私はすぐに◎をつけていると思います。

☆ ☆

教え子たちに「小学校のことで覚えていることは何かな？」と聞くと、授業のことを言う教え子は、悲しいかなほとんどいません。

「先生と一緒に相撲をしたこと」

「放課後、先生と野球をしたこと」

「ドッジボールで先生を当てたこと」

そんな話がいっぱい出てきます。子どもたちにとって先生と遊んだことは一生の思い出になっているのです。かくいう私も小学校の時に、先生と鬼ごっこをして学校中を逃げまくったことを鮮明に覚えています。

私が新任教師時代に先輩から言われた言葉があります。

「先生をやっていたら、うまくいかずに悩むことも必ずあるんだ。そんな時に一番いいのは子どもと遊ぶことだ。『悩んだ時は遊べ』『とにかく遊べ』きっと何かが変わるから・・・」

授業がうまくいかない時、学級の雰囲気が悪い時、私はいつも以上に子どもたちと遊びました。するとどうでしょう。不思議なことに授業も学級もよくなっていくのです。先輩の言うことは本当だったのです。

遊ぶのがなぜいいのか。その効果についての理論的な説明は大学教授にお任せするとして、私は遊ぶと「元気になる」のです。汗をいっぱいかいて教室に戻ってきた時、なんか気持ちがいいのです。子どもと同じように汗を拭きながら一緒に教科書を開く時、教室はいい雰囲気になります。それを一体感というのでしょうか。そして先生も子どもたちもみんないい顔で、元気に授業が始まるのです。

新学期が始まってもうすぐ1カ月です。新任教師は悪戦苦闘の毎日だと思います。毎日の教材研究は山ほどあるし、保護者との対応もあるし、職員会議や研究会など目の回る一日です。でもそんな合間をぬって、ぜひ子どもたちと遊んでほしいのです。もっと言えば、合間ではなく、何かをカットしてまでも遊んでほしいのです。教材研究が少々おろそかになっても、一緒に遊んで元気な顔で授業をする先生を、子どもたちはきっと許してくれますし、そんな先生が大好きなのです。

憧れの教師になったのに、うまくいかずに悩んでいる人もいるでしょう。自信をなくし、もう辞めたいと思っている人もいるかも知れません。そんな先生に言いたいです。

「とにかく遊べ！」

☆ ☆

もし私が、教育委員会で初任者研修の担当なら、どんな研修を組むか。

ぜひやってみたい研修があります。それは「遊びの宿泊研修」です。朝から夜中まで遊びまくる研修です。「バラ当てドッジ」に「三角ベース」、「うずまき遊び」に「おしくら饅頭」、「ケイドロ鬼」に「こおり鬼」、そして「川遊び」に「肝試し」……。そんな遊びに、子どものように夢中になり、喜び、悔しがり、笑って、泣く。そんな楽しさを先生たちに思い出してほしいのです。

今、先生に必要なのは、そんな「子ども心」や「遊び心」なのでしょう。

体育科教育 2010 年 7 月号 卷末エッセイ

仲島正教

「あいつのために頑張る」

「美ら島沖縄総体 2010」

今年のインターハイは沖縄県で開催されます。青い空とエメラルドグリーンの海に高校生も歓喜することでしょう。6月は、そんな沖縄インターハイを目ざした予選会が全国各地で繰り広げられています。

☆ ☆

私はこの時期になると必ず思い出すことがあります。それは6年前のあの日のことです。県高校バスケット決勝リーグ。私の息子の高校が勝ち上ってきて、あと1勝でインターハイ出場が決まるという試合のことです。

また話はさかのぼりますが、息子はインターハイに出たいという夢のために、隣の体育科が設置された公立高校に進学しました。この高校はインターハイにも過去2度ほど出場している強豪校で、中学時代に「県選抜」だった選手も多数入学していました。息子は体育の成績はよかったものの、バスケットに関しては無名の中学の無名の選手です。入学してからは、試合どころかベンチにも入れない状態が1年間ほど続きました。

「県選抜」だった同級生の泰男は、1年生からすでにエースとして活躍していましたが、泰男は練習が終わった後にいつも息子と1対1をしてきていたのです。その練習の甲斐があって息子は2年生になると時々試合に出るようになり、3年生では何とレギュラーになったのです。

「泰男師匠のおかげや」

息子はいつもそう言っていました。

そしていよいよ高3の6月、インターハイの最終予選が始まった頃、泰男が病に倒れ入院してしまいました。エースを欠き苦戦続きながら何とか決勝まで勝ち進みましたが、相手はインターハイ常連校、去年も負けています。エース不在の息子の学校の不利は否めませんでした。

決戦前夜、息子は言いました。

「俺は泰男のために絶対にがんばる。必ずあいつをインターハイに連れていくんや！」

これまで自分の事しか考えてこなかった息子からの「泰男のために頑張る」という言葉に私は驚いてしまいました。

翌日の決戦はすばらしい試合でした。エースを欠くチームだからこそ、より結束力を高めようと何度も何度も円陣を組み気合いを入れるのです。試合は一進一退でしたが一度もリードを許さずにタイムアップ。試合終了と同時にベンチの端にいた泰男と抱き合っ泣く息子たちに、観客席の私達も涙、涙、涙のインターハイ出場決定でした。

8月のインターハイには泰男は戻ってきました。泰男は

「今度は俺がみんなのために頑張る」

と言って、エースらしい働きをしてくれました。

後日談ですが、あの時泰男が元気でいたら、もしかしたらあんな勝ち方はできなかったかもしれないなと・・・。

人は「自分のために」ではなく「あの人のために」と思った時には、きっと力以上のものが出るのでしょうか。

人は、人によって支えられ、人によって強くなっていくのです。

☆ ☆

今シーズンのジャイアンツは強力です。ただでさえ戦力的にも他球団を上回るのに、選手たちは口々に言います。

「拓さんのために絶対に優勝する！」

4月に急逝した木村拓也コーチのためにジャイアンツは一丸となっています。

大のタイガースファンの私は複雑な心境なのです。

「アホになろう！」

7月11日夜、参議院選挙の開票が始まった頃、私は甲子園球場で大騒ぎをしていました。万歳万歳の大合唱、首位巨人に0.5差に迫ったのです。菅総理には申し訳ないのですが、あの夜、私は甲子園でアホになって騒いでいたのです。（※投票を済ませてからです）

関西以外の方が甲子園球場に来て阪神タイガースの試合を見るとビックリすると思います。阪神ファンは勝っても負けてもいつも大騒ぎです。たとえ10点差で負けていてもけっして途中では帰りません。もしかしたら逆転するのではないかと思っているのです。阪神の選手がホームランでも打とうものなら、隣の席の知らないおっちゃんとも固い握手です。中にはハグする人もいます。阪神ファンはみんな仲間なのです。関西ではこれを「アホな奴」と呼んでいます（笑）

☆ ☆

「私は自分のこんな所が好きです」
こんなテーマで道德の授業をした時、子どもたちは
「友だちがいっぱいいる自分が好き」
「家族が好きな自分が好き」
「自分の夢を持っている自分が好き」
といろいろ書いてくれたのですが、ある子は
「アホになれる自分が好き」
と書きました。なぜこんなことを書いたのか？それは多分こういうことでしょう。
私は4月の学級開きの時に子どもたちに言いました。

「みなさんよろしく、担任の仲島先生です。先生はこの学級をアホなクラスにしたいと思います。だからまずはみんなでアホになって踊りましょう！」
そんな挨拶に子どもたちは引いてしまうのですが、私は一人で踊り始めます。すると子どもたちの中には優しい子がいるものです。先生がかわいそうと思ったのでしよう、3人ほどが前に来て一緒に踊ってくれました。

1週間後、その踊りの輪は10人ほどになっていました。1ヶ月後にはなんと全員が一緒に踊るようになりました。するとどうでしょう。授業の様子が変わっていったのです。私が机間巡視しているとノートを手で隠そうとしていた子が「先生、これわかりません」と言うのです。隣の子が覗くと「見るな！」と怒っていた子が「わからんから教えてよ」と友だちにたずねているのです。今まで殻をかぶって自分を隠していた子が殻を破り、自分を出すようになってきたのです。自分を解放してきたのです。

「間違えても恥ずかしくないよ」

「私、前より元気になりました」

「みんなで教え合う算数は大好き！」

「アホになったら、とっても楽しいね」

自分を解放することはいろんな所で波及効果を及ぼします。一人ひとりが自信を持ち、元気になります。話し合いは活発になるし、クラスの団結力が高まります。秋の運動会では、バトンパスの声が大きく響き渡りました。綱引きの様子は保護者の中で評判になりました。

「アホみたいに応援する先生の姿に笑ってしまいましたよ。でも子どもたちがその先生の声に合わせて必死で綱を引く姿に感動しました。我が子は『これが支え合う綱引き』と自慢していました」

☆ ☆

私はここ数年、幾つかの市の初任者研修に招かれ、新任教師に話をしています。冒頭に言うのがいつも「アホになろう！」です。まずは教師の心を解放することからスタートです。

勝っても負けても応援する、10点差があってもあきらめない、隣の人とも自然に握手が出来る、そんな阪神ファンのアホな姿は、私の学級づくりのお手本なのです。

体育科教育 2010.11 巻末エッセイ

仲島正教

「たかがライン引き、されどライン引き」

試合開始前の甲子園球場ではすごい職人芸を見ることができます。両チームの練習が終わった後、グラウンド整備が始まるのですが、これが本当に見事なのです。整備の方が手際よく土を均し、そして水をまきます。その様子は一つの演技のようです。そして真っさらになったグラウンドの最後の仕上げは、ライン入れです。三塁から、一塁からファウルラインがまっすぐにひかれます。そうです、まっすぐなのです。手作業で引いているのにまっすぐなのです。最後にバッテリーボックスのラインもきれいに入り、プレーボールです。

☆ ☆

運動会の朝、子どもたちは普段の運動場の様子とは一変したきれいなトラックを見て、目を輝かせます。「早くここで走りたい！」

私は覚えています6年生の時、運動会の準備をしていて、先生が最後にトラックのラインをきれいにしていたことを・・・。「自分もあんなラインを入れてみたい」

15年後、私は体育主任になり、運動会の準備の最後にトラックのラインを入れる立場になりました。他のラインは「ライン係」の子どもたちにさせ、最後の聖域は私がするのです。子どもたちは「先生はなぜそんなにまっすぐに引けるの？」と

憧れの眼差しで見てくれています。「僕もやってみたいなあ」そんな声が聞こえてきました。

私は翌年から思い切って、子どもにさせてみることにしました。他の先生からは「それは教師の仕事」と言われましたが、私は子どもに任せたのです。すると、子どもは大喜びです。でも簡単にはまっすぐに引けません。どうしても曲がるのです。何度も何度も練習をします。運動場の端はラインで真っ白になりました。

「先生、ごめん」

「気にするな、あとは先生が土をかぶせておくから」

練習は連日にわたります。すると子どもたちはコツをつかみ、だんだんまっすぐに引けるようになりました。運動会前日、見事なラインが引かれました。「先生、明日が楽しみや」そう言って胸をはる「ライン係」の子どもたちでした。

運動会当日の昼休みにこんな出来事がありました。この春転勤してきたばかりのA先生が、気を利かせて午前演技で消えかかったラインを引き直そうとしたのです。すると間髪入れずに、私の意図をよく理解して下さっていたB先生が「A先生、それはしたらダメ！子どもがするから！」と注意して下さったのです。あっけにとられたA先生でしたが、その後の子どもの様子を見て納得して下さいました。

弁当を食べ終わった「ライン係」はゆっくりトラックを回りながら、ラインを引き直し始めたのです。再び真っ白なラインが浮かび上がりました。

☆ ☆

教師がやれば簡単にまっすぐなラインが引けます。でも子どもにさせると、たくさん手間と時間がかかります。「子どもはまっすぐに引けない」のです。でも子どもは「まっすぐに引いてみたい」と思っています。そんな子どもの心のスイッチをONにしてやると、時間を忘れて練習します。教師が言わなくても、自分が引いたラインが消えかかっていたら、すぐに気づき自分で直そうとします。

運動会とはリレーや組体操の演技だけではないのです。こんな係の仕事もやり遂げる経験をさせてやりたいのです。子どもにとって運動会の係とは、教師の下請けの仕事ではなく、自分が自分の力で役割を持って役立っているという自己肯定感を育む場でもあるのです。

ある小学校の校長先生が開会の言葉でこう言われました。

「参加するというのはただそこにいるのではなく、役割を持ってそこにいることです。英語では参加することを **take part** (役割を持つ) というのです」